

目次

はじめに (近藤ブラウン妃美・坂本光代・西川朋美).....	i
序章 親と子をつなぐ継承語教育 (近藤ブラウン妃美)	1

第1部

バイリンガル・マルチリンガル発達理論 からみた継承語習得

1章 バイリンガル・マルチリンガルの継承語習得 (坂本光代)	15
2章 継承語習得と認知能力発達 (田浦秀幸).....	26
3章 家庭・学校・コミュニティにおける継承語話者の言語選択 (坂本光代)	40
4章 日本語を優勢言語としない子どものバイリテラシー習得・発達 (折山香弥)	54
COLUMN 1 第一言語、母語、ネイティブランゲージの違い (近藤ブラウン妃美)	71

第2部

海外における継承日本語学習者： 言語学習・モチベーション・アイデンティティ

5章 米国現地校における英語学習者 (バトラー後藤裕子).....	75
6章 継承語学習のモチベーション／動機づけ (森美子).....	88
7章 継承日本語とアイデンティティ形成 (知念聖美)	101
8章 米国における学齢期の子どものための継承日本語学習の機会 (片岡裕子)	113
COLUMN 2 継承語の言語的特徴 (西川朋美).....	126

第3部

海外における継承日本語教育： 指導・教材・評価

9章	幼児や低学年児童対象の継承日本語教室で使う教材（山本絵美）	131
10章	北米の日本語学校における学習者のニーズの多様化（リー季里・ドーア根理子）	147
11章	外国語学習者と継承語学習者の混合日本語クラスでの指導（ダグラス昌子）	160
12章	欧州における継承日本語教育と欧州言語共通参照枠（CEFR）（奥村三葉子）	175
13章	海外における継承日本語学習者のための評価（近藤ブラウン妃美）	190
COLUMN 3	海外で育つ子どもの実態（坂本光代）	204

第4部

日本における外国にルーツを持つ 子どもの継承語教育

14章	日本の公立学校における日本語を母語としない子どもへの言語教育（西川朋美）	209
15章	国境を越えた子どもの異言語・異文化の壁（川上郁雄）	224
16章	対話型言語能力アセスメント「DLA」の有用性（櫻井千穂）	238
17章	中国にルーツを持つ子どもの母語・継承語教育（高橋朋子）	253
18章	日本における外国にルーツをもつ子どものための継承語教育と言語政策（久保田竜子）	268
COLUMN 4	継承語教室は誰のため？（西川朋美）	283
引用文献		285
キーワード索引		316
執筆者紹介		324

親と子をつなぐ 継承語教育

近藤ブラウン妃美

1 「親と子をつなぐ継承語」とは

日本で日本人の家庭に生まれ育った子どもは、**第一言語**である日本語を自分の優勢言語（最も習熟した言語）として使い、学びながら成長していきます。しかし、何らかの事情で子どもが海外で生まれたり、言語形成期に海外に移住して移住先の主要言語で教育を受けるようになると、成長と共に、子どもの優勢言語が第一言語から移住先の主要言語へと変化します。もちろん、子どもの優勢言語が第一言語から移民・移住先の国の主要言語に移行しても、その子どもにとって「生まれて最初に習い覚えた」という意味で第一言語であることには変わりありません。しかし本書では、移住などの事情で、優勢言語でなくなってしまった第一言語を**親と子をつなぐ継承語**（もしくは、**親からの継承語**）と位置づけ、親の母語を子どもが継承していくことの個人的および社会的意味や価値、その指導・学習方法、また継承語維持・発達に影響を与えるさまざまな社会心理的要因や言語政策について考えていきます。

したがって、本書で扱う**継承語話者**（heritage language speaker）や**継承語学習者**（heritage language learner）は、主に、移住先の学校や大学で国の主要言語で教育を受けながらも、親の母語を自分の継承語として家庭、学校、コミュニティで学び、維持・使用しているバイリンガル・マルチリンガルの子どもや若者

バイリンガル・ マルチリンガルの 継承語習得

坂本光代

問

バイリンガルにはどのようなタイプがあり、継承語習得とどう関係しているのでしょうか。バイリンガルとは、二言語を母語話者のように使いこなす人のことを意味するのでしょうか。マルチリンガルの場合はどうですか。

答

「バイリンガル」と言うと単純に「母語と別の言語が話せる人」、「第一言語 (first language [L1]) + 第二言語 (second language [L2]) = バイリンガル」と考えられがちですが、実は言語の習得時期や、発話・作文力の程度の違いなどによって、さまざまなタイプのバイリンガル・バイリンガリズムがあります。しかも、好ましいものもあれば好ましくないパターンもあります。L1 と L2 は相互依存の関係にあると考えられ、バイリンガルの語彙やメタ言語意識 (= 言語を客観的に観察・意識する視点) にはバイリンガル特有の特徴があります。また、マルチリンガルはバイリンガルよりも言語が多いため、より複雑になります。継承語習得は、社会の主要言語ではない言語を習得・保持することになるため、L1 と L2 の関係性を意識し、計画性を持って臨む必要があります。

継承語習得と 認知能力発達

田浦秀幸

問 い

バイリンガルやマルチリンガルの子どもはモノリンガルの子どもよりも認知能力に優れているというのは単なる神話でしょうか。それとも、何か科学的証拠に基づいたものなのですか。もし継承語習得が認知能力発達に繋がるのであれば、どのようなアプローチがより効果的ですか。

回 答

バイリンガルの認知能力は全ての面でモノリンガルに優るのでなく、(1) メタ言語能力 (言語を客観的に捉えられる能力)、(2) 選択的注意力 (必要項目だけに注意を払う能力)、(3) 心の理論 (他者の立場が理解できる能力) の面で優位性が幼児期から存在すると考えられています。学齢期でも優位性を享受するには、学校教育言語で年齢相応の言語力をつけた上で、継続的に努力を積み重ねて継承語の読み書き能力 (年齢相応ならベスト) を身につけることが望まれます。

家庭・学校・ コミュニティにおける 継承語話者の言語選択

坂本光代

問 い

バイリンガル・マルチリンガルである継承語話者の言語習得や使用は、社会と個人の関わり合いの中でどのように育まれていくのでしょうか。家庭、学校、そしてコミュニティにおける継承語選択・使用を理解するうえで留意すべきことは何でしょうか。

回 答

言語を習得する・自分が属するコミュニティの言語リソース（言語レパートリー）に基づいて自分の言語力を伸ばす・レパートリーの中からその場面で必要な表現を取捨選択し、使用するということは、個人だけの個別活動ではなく、個人と社会との関連性によって育まれます。子どもが最初に接する小さな社会（＝家族）から始まる言語習得は、独特の特徴があります。言語のレパートリーを増やすことでどのような変化が期待されるのか、また子どもの言語レパートリーを増やすために親は社会の一員そして子どものお手本として、どのような姿勢で取り組むべきかを、社会言語学的見地から考察することができます。

日本語を 優勢言語としない子どもの バイリテラシー習得・発達

折山香弥

問

複言語環境で育つ子どもは、二言語で問題なく日常会話はできて、優勢言語でないほうのリテラシー（特に読み書き能力）に関しては個人差が大きいようです。日本語を優勢言語としない子どものバイリテラシー（二言語リテラシー）習得・発達を促すために、家庭や学校でどのようなサポートが必要ですか。

答

海外の、日本語が優勢でない環境で育った子ども、日本に来てからの滞在年数が短く家庭言語が日本語ではない子どもなど、バイリテラシー習得・発達が難しいケースはさまざまです。特に、優勢言語でないほうのリテラシーを会話能力と共に発達させるには、一般に家庭だけでなく、学校やコミュニティ、社会による多様な社会文化的支援が必要です。本章では、これまでの研究と理論を基に、なぜ継承語リテラシー育成は重要なのか、必要な社会文化的支援とは何か、バイリテラシー習得・発達にどのような影響を及ぼすのか、説明していきたいと思いません。

米国現地校における 英語学習者

バトラー後藤裕子

問

米国では、日本語を話す学齢期の子どもがほとんどが、現地校に通うそうですが、英語の習得に関して、学校でどのような配慮や対策がなされているのですか。また日本語を維持させると、現地校での学習に遅れが出てしまうのではないかと心配ですが、取り越し苦労でしょうか。

答

米国では、家庭で英語以外の言語を話しているなどの理由で、当該年齢に相当する英語力を習得していない児童生徒(英語学習者)には、通常の指導に加え、特別な言語教育支援を行わなくてはならないことが法で定められています。ただし、受けられる支援の内容は、州・地域により違いがあります。また、子どもの母語を維持することで、英語の習得や現地校での学習に支障をきたすのではないかといった危惧を裏付けるような実証データは存在しません。むしろ多くの研究により、母語の維持が英語や他の教科の学習にプラスに働くことが分かっています。

本章では、米国に焦点を当て、保護者にとって有益と思われる米国の言語教育政策の背景と、英語学習者を対象とした言語教育支援、そしてその課題について概観します。

継承語学習の モチベーション／動機づけ

森美子

問 い

外国語・第二言語としての日本語学習では、モチベーション／動機づけが深く関係していると言われていますが、継承日本語学習でも同じことが言えますか。もしそうなら、家庭、学校、そしてコミュニティで、継承語学習の動機づけを高める方法を教えてください。

回 答

継承語学習は、外国語・第二言語学習に比べ、学習者の年齢が低い場合が多く、長期にわたって保護者に依存する部分が大いなので、子どもも保護者も高い動機を持ち続けることが必要です。学習者が意欲と自信を持って、自分で継承語学習に取り組めるようにするには、家庭、学校、コミュニティが協力してサポートするだけでなく、それぞれが違った役割を果たさなければなりません。本章では、継承語学習者のモチベーションを高めるために、家庭、学校、コミュニティで何ができるかを考えてみます。

継承日本語と アイデンティティ形成

知念聖美

問

海外で育つわが子が、健全なアイデンティティや自分の文化ルーツに対するプライドを持ちながら生きていってほしいと願っています。継承日本語能力・使用は、やはりアイデンティティ形成と深い関係があるのでしょうか。アイデンティティ形成に関して、海外で子育てをする日本人保護者に参考になる情報があれば、教えてください。

答

複数の言語と文化を経験して育った子どものアイデンティティは、流動性と複数性を伴うものと考えられています。そしてそのアイデンティティ構築には他者の存在が大きく寄与します。アイデンティティと言語能力・使用については、関連性を指摘する報告が多数ありますが、その一方で、それが確認できなかったという報告もあり、一概には言えないようです。

米国における学齡期の 子どものための 継承日本語学習の機会

片岡裕子

問

米国でカリフォルニアのように日本人移民者・長期滞在者の多い州では、日本にルーツを持つ子どもは現地校に通いながら、どこでどのように日本語を学習していますか。現地校や週末（もしくは放課後）日本語学校における継承日本語教育の現状を教えてください。

答

日本にルーツを持つ子どもたちが現地校に通いながら学んでいる全国的な教育機関は、日本への帰国を前提として設立された補習授業校です。しかしカリフォルニアのような州では、補習授業校のほかに、継承日本語教育を目指す新旧の継承日本語学校、そして外国語としての日本語教育も盛んな現地校の中から、子どもの年齢、日本語力、目標、家庭での言語環境、現地校での活動などを考慮して選ぶことができます。これは、移民者、長期滞在者などの多い州の利点ですが、継承語学習についてはまだまだ一般的に理解されていないことも多くあります。

幼児や 低学年児童対象の 継承日本語教室で使う教材

山本絵美

問

幼児や低学年の児童を対象にした日本語教室で継承日本語を教えています、どのような点にポイントを置けばいいのでしょうか。複言語環境に育つ子どもが楽しく、かつ効果的に日本語を学べる教材作成のポイントや、いい教材があれば教えてください。

回 答

教材作成のポイントは、日本語の学習のみに捉われないことです。まずは、一人ひとりの子どもにとっての日本語、現地語、学校で使っている言語などが何かを理解しましょう。言語ポートレートを使うと、子どもの体験する言語や文化が可視化できます。そして、教材は「いろいろなくに」「たべもの」など話題別にすることで語彙の幅を広げつつ、いろいろな活動も盛り込みやすくなります。また、子どもが使えるほかの言語や、複数の文化の知識も含めて使えるものはすべて使うことや、子どもの好きなことにつなげることも重要です。子どもの「好き」という気持ちに寄り添った教材を使うことは、楽しく効率的な学習への第一歩です。

北米の 日本語学校における 学習者のニーズの多様化

リー季里・ドーア根理子

問

北米の日本語学校¹では、日本への帰国を前提にした日本人の子どもだけでなく、帰国の予定のない日本人永住者の子どもの割合が増加しているようです。現地の日本語学校はこのような学習者のニーズの多様化にどう対応しているのでしょうか。

答

北米の日本国籍を持つ日本人を親に持つ子どもの言語背景の多様化は経済社会のグローバル化に伴って、ますます顕著になってきています。こういった子どもが現地校に通いながら日本語を学習する機会は、北米全体ではほとんど補習授業校に限られています。比較的大きな補習校では、国語教育と継承語教育を並列して提供したり、あるいは本来の目的のいわゆる文科省の定める学習指導要領にのっとった国語教育だけに専念したりというような対応をとっています。しかし小規模の補習校では、各学校が苦勞しているのが現状です。それに対抗して、継承語教育をメインとして教える日本語学校も現れ始めました。

1 北米での「日本語学校」は、一般的に日本語を外国語として教える学校ではなく、日本語を「国語」あるいは「継承語」として教える学校のことを指す。

外国語学習者と 継承語学習者の 混合日本語クラスでの指導

ダグラス昌子

問 い

海外の大学で日本語を教えています。継承日本語学習者も少なくありません。外国語学習者と継承語学習者の混合した日本語クラスで、日本語レベルや日本語習得背景の違いに対応しながら、大学で日本語を効果的に指導する方法について教えてください。

回 答

混合クラスは、カリキュラムの適応性と柔軟性が鍵になります。教科書を使って同じ内容を同じペースで学ぶカリキュラムではなく、学習成果、学習内容、学習活動を学習者のニーズに適應させる学習者中心のアプローチと、内容と言語を統合的に教えるアプローチが必要になります。このアプローチを枠組みにして、学習者のニーズに応じて学習活動を差別化し、また一時的な学習支援（＝スキャンフォールディング）を柔軟に組み込む必要があります。また、クラスという形態ではなく、テクノロジーを利用した個別学習も選択肢の一つになります。

欧州における 継承日本語教育と 欧州言語共通参照枠 (CEFR)

奥村三菜子

問

欧州言語共通参照枠 (Common European Framework of Reference for Languages [CEFR]) は、欧州をはじめ世界各地における言語教育に大きな影響力を持つと聞きます。複言語主義 (plurilingualism) や行動中心アプローチ (action-oriented approach) など、CEFR で強調されている理念やアプローチは、欧州における継承日本語教育にも応用できるのでしょうか。

答

はい、十分に応用できます。CEFR は、各国の公用語、方言・地域語、移民の母語・継承語、手話など、欧州社会で使用されているあらゆることばの教育を対象としています。ですから、外国語教育はもちろん、国語教育、継承語教育、異文化理解教育など、ことばと文化の教育に幅広く応用できます。CEFR の理念である複言語・複文化主義では、人間一人ひとりが持つことばや文化の能力を重視しますので、個人差が大きいと言われる継承日本語教育にはむしろ大変適した参照枠だと言えます。

海外における 継承日本語学習者のための 評価

近藤ブラウン妃美

問 い

海外で継承日本語を教えています。評価に関しては研修を受ける機会も少なく、主に自分の経験や判断に基づいて行っています。しかし、ほかの教員や保護者と評価についての考え方の違いもあり、評価は難しいと感じます。現場で何をどう評価すればいいのかを教えてください。

回 答

評価と授業は相互関係にあり、ほかの教師と評価に対する考え方が違う場合は、継承日本語の指導法に対する考え方も違うことが多く、確かに難しい問題です。しかし、自分のできる範囲で評価を改善していけば、学習者の学びをもっと支援することができます。海外の継承日本語学習者のニーズや学習環境は実に多様で、どの状況にも当てはまるベストの評価法というのはありません。現場の教師は、与えられた環境下で、学習者の背中を押せる評価というものを常に考えながら指導をしなくてはなりません。簡単なことではありませんが、良い評価は学習者の成長を助け、次の目標に向かって前進できる力を育てることができます。

日本の公立学校における 日本語を母語としない 子どもへの言語教育

西川朋美

問

日本の公立学校に通う日本語を母語としない子どもが増えていて、特に中国語やポルトガル語を母語とする子どもが多いようです。日本の公立学校において、日本語を母語としない子どもに対する日本語教育および継承語教育はどのような現状なのでしょうか。今後の課題について教えてください。

答

公立学校に在籍する日本語を母語としない子どもの数の増加と共に、その受け入れ体制（日本語教育）は少しずつ整えられてきました。とは言え、実際の取り組みについては、地域や学校によって、かなりの差があると思われます。また、公立学校における継承語教育については、一部の先進的な取り組みを除いて、ほとんど行われていないと言っても良いでしょう。公立学校における継承語教育については、まずはその重要性が認識されるところからスタートする必要があると言って良いほど、課題は山積みです。

国境を越えた子どもの 異言語・異文化の壁

川上郁雄

問 い

成長の途中で国境を越えて日本に移住した外国にルーツをもつ子どもや若者で、日本の学校環境にうまく順応したというケースに何か共通点はありますか。中には国際結婚家庭に生まれ、一目で「ハーフ／ダブル」の子どもだと分かる子どももいます。彼らはどのようにして異言語・異文化の壁を乗り越えることができたのでしょうか。また、その過程で継承語維持・発達はどのような意味があったのでしょうか。

回 答

「成長の途中で国境を越えて日本に移住した外国にルーツをもつ子どもや若者」が日本の学校環境に「順応」する際、周りの人がその子どもや若者の声をどう受け止めるかが重要な鍵となります。「ハーフ／ダブル」の子どもだと分かる子どもが「異言語・異文化の壁を乗り越えることができた」と思えるのは、自分は自分だと自尊感情や自己有能感を感じる時です。その場合も、周りの人との関わりが重要な要素となります。またそれらの子どもにとって「継承語維持・発達」は、自分のアイデンティティや生き方を考える際の重要な要素の一つとなるでしょう。

対話型言語能力 アセスメント「DLA」の 有用性

櫻井千穂

問 い

外国にルーツを持つ子どもの日本語能力を評価するツールに、文部科学省の開発した「外国人児童生徒のためのJSL対話型アセスメントDLA」がありますが、これはどのような評価ツールですか。この評価ツールは日本語以外の言語や継承日本語の評価にも使えますか。

回 答

DLAは学齢期の外国にルーツを持つ子どもの「話す」「読む」「書く」「(教室談話を)聴く」力を、一対一の対話を通して測る、支援付き評価法です。用意されたキットを使って測定した後、「JSL評価参照枠」¹(文部科学省, 2014: 8)に示された六つのステージの記述文に照らして子どもの言語能力を包括的に把握します。それと同時に、どのような学習支援が必要であるかを多角的に検討します。対話による評価の進め方は、日本語以外の言語にも応用できる構造になっています。また継承日本語の評価にも活用可能です。

1 「JSL」は、「Japanese as a Second Language (第二言語としての日本語)」の略語である。

中国に ルーツを持つ子どもの 母語・継承語教育

高橋朋子

問

近年日本に住む中国ルーツの子どもや若者が増えていますが、主にどのような経緯で日本に住んでいるのですか。また中国経済発展の影響で日本の中華学校に通う日本人児童も多くいると聞きます。日本国内における母語・継承語教育の現況を教えてください。

答

中国ルーツの子どもや若者には、老華僑、中国残留邦人および中国帰国者、新華僑や国際結婚をした人々およびその子弟などがいます。中国にルーツを持つ子どもや若者への母語・継承語教育として、日本では公立学校での母語教室、民族学校での国語としての中国語教育、地域が支援する教室などが挙げられます。また、中国の国際的地位の高まりにより、中国語や中国文化を学ばせたいという理由で、子どもを中華学校に通わせる日本人家庭も増えていましたが、近年は落ち着きを見せています。

日本における 外国にルーツをもつ 子どものための 継承語教育と言語政策

久保田竜子

問 い

日本政府も国の「グローバル化」や「国際化」を推進していますが、言語政策・教育に関しては、国際舞台で「経済的価値ある言語」として英語能力を崇拝する傾向にあるように思います。今後、日本はどのように多文化・多言語共生社会をめざし、多言語での継承語学習をサポートしていくべきでしょうか。

回 答

日本の教育に見られる英語一辺倒とその裏返しが多言語教育軽視は、グローバル化にまつわるイデオロギーや政治性と深く関わっています。多言語での継承語学習を促進していくためには、言語や文化の多様性および継承語学習の意義を確認し、既存のイデオロギーに対抗していく方策を探る必要があります。